

学位論文の内容の要旨

真珠庵本『百鬼夜行絵巻』は、妖怪が描かれて詞書や文字情報がない特異性によって内容の解明が課題である。本論文では文献や絵画との照合によって、真珠庵本の全容解明を試みている。

序では、真珠庵本の概要と先行研究の状況を述べ、次いで本研究の概要として、妖怪には仏教色が濃く、全巻に亘って仏教が深く関与し主題となっている可能性を指摘する。

第一章「『百鬼夜行絵巻』の行列と舞楽法会」では、法会の行列に着目して、妖怪が舞楽を表現することや行列の構成が舞楽法会の次第と共通することを明らかにし、真珠庵本の妖怪行列は舞楽四箇法要に倣っていると指摘する。

第二章「妖怪の信仰—『百鬼夜行絵巻』の道具と宗派」では、妖怪が携える道具に検討を加え、妖怪は仏教の宗派に分けられている可能性があり、彼らの対立的な関係性には、絵巻制作当時の宗派間における対立・競合が反映されていると論じる。

第三章「破戒の経典と妖怪をめぐって—『百鬼夜行絵巻』の方法」は、几帳と唐櫃の場面に『法苑珠林』の破戒に関する記述が絵画化されている可能性があり、そうであれば舞楽法会を模した行列の中央部に破戒が描かれていることになることを述べる。

第四章「『百鬼夜行絵巻』に描かれた妖怪と仏教」は、几帳と唐櫃に続く場面に描かれる妖怪は破戒を示し、唐櫃の場面と密接な関係性が認められるところから、絵巻中央部分には破戒が想定される場面が範囲を広げて連続していると指摘する。さらに真珠庵は禅寺であり、絵巻に詞書きがない理由として禅の教えが係わっている可能性を提示する。

第五章「鍋と釜—『百鬼夜行絵巻』に見る神事の位相」では、台所道具を被る妖怪たちには神事の要素が見られる一方、鍋と釜の妖怪には修験者が想定され、ここには神事と仏事が混在している事、男女の反転や修験者の恋や嫉妬などが二重性を以て描かれている事を示す。

第六章「『百鬼夜行絵巻』と『天狗草紙』の関連性—妖怪退散をめぐって」は、絵巻には天狗が描かれ、仏教界を天狗に擬える『天狗草紙』と密接な関連性があるが、天狗を含む行列が畜生の行列ならば、畜生を退散させる火の玉の意味には地獄の火車が妥当と結論づけている。加えて真珠庵の開祖一休の詩と絡める捉え方を提示する。

第七章「説話から読む『百鬼夜行絵巻』—小町と和泉式部」では、几帳の場面に説話の中の小野小町と和泉式部が描かれている可能性を示し、二人を示す妖怪を仏教的な側面からも読み解こうと試みている。この場面には稚児と僧との関係性も窺われる。

第8章「百鬼夜行絵巻跋文における儒学的受容—歴博本と岩瀬文庫本の場合」では、共に跋文のある国立歴史民俗博物館蔵『百鬼夜行図』と岩瀬文庫蔵『百鬼夜行画卷』を考察する。両者の成立年代には200年の差がある上に漢字に対する仮名交じり文という表記の違いもある

が、百鬼夜行を儒学的に捉える跋文の姿勢は共通する。近世を通じて妖怪は儒学の教えを説くための格好の材料として享受されたことも考えられる。